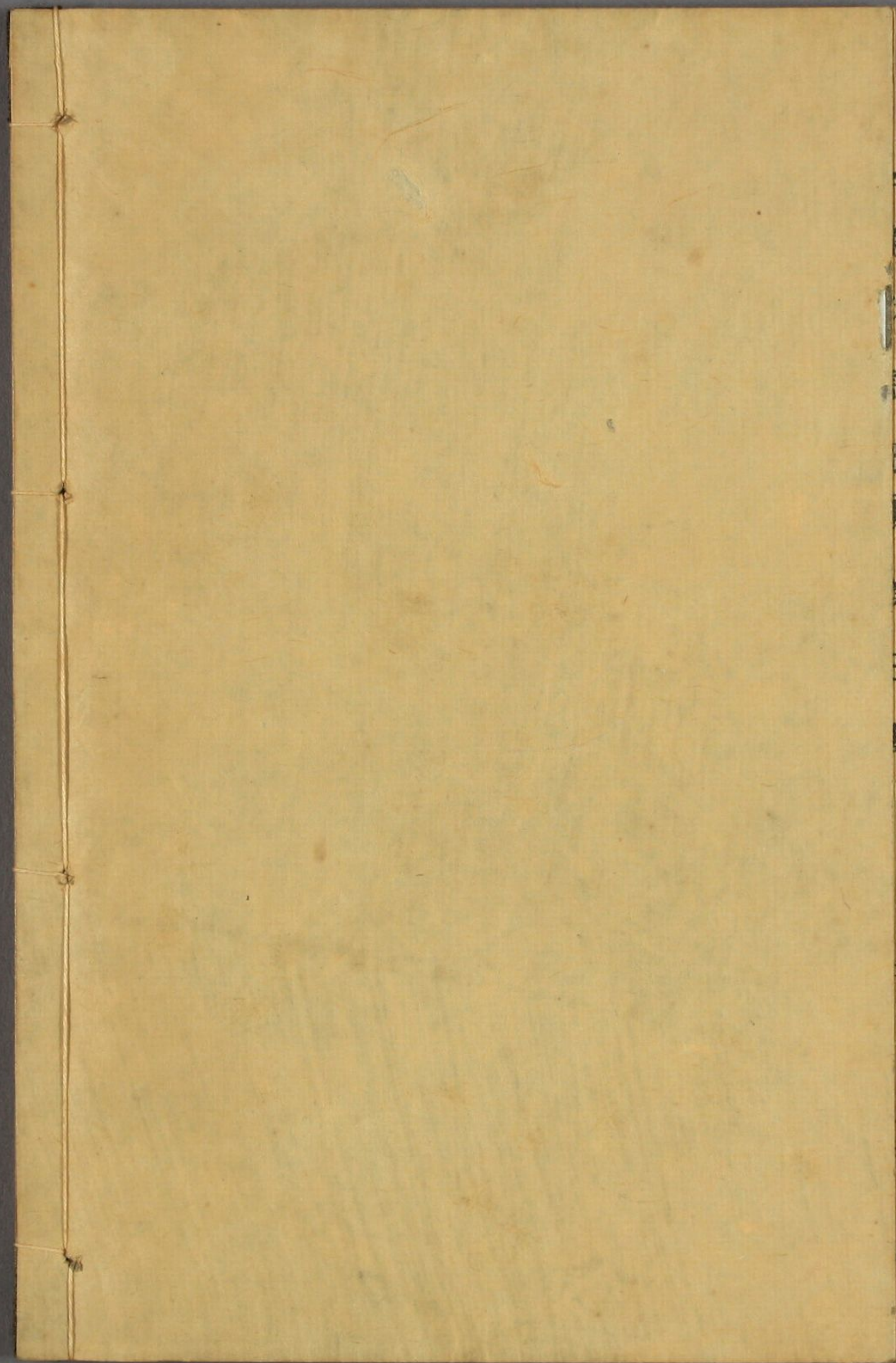


刻 翻

新
体
詩
歌

竹
内
隆
信
編
輯
第
三
集





新體詩歌第三集序

和歌裨於世教。漢詩亦益於德化也。明矣然而非入其道熟之。則吟之咏之其感情猶與雜僧誦經一般而已。夫俚歌俗謠。童幼婦女好而誦之者。所謂雖鄭聲導情欲之所致。亦是解之易也。矣曩者學友竹內氏。有新體詩歌第一第二集之編。今又以所輯第三集示余。受而誦之。其語不高。其調不卑。苟通僅々普通之文字者。悉得誦之解其意也。而句々慷慨盡忠。章々友愛貞節。使其感動人心也深矣。余謂以此詩歌。易彼俚歌俗謠。令人々誦

之。則其志氣自昌。其情性自和。而遂移風。易俗。亦非難也。因聊記之。以表感情之一端云爾。

明治十六年癸未三月上浣 雨軒坂部識

新体詩歌第三集

目次

- テニソン氏輕騎隊進撃の詩
 - 朝貌の花に寄せて學童を獎勵す
 - 題秋 (西詩和譯)
 - ロングフエロー氏人生の詩
 - ロングフエロー氏兒童の詩
 - 社會學の原理に題す
 - 遊墨水歌
 - 詠和氣公清麻呂歌
- 以上八篇

新体詩歌第三集

坂部廣貫校閱
竹内節編纂

左の詩一は千八百五十四年英佛の兩國土耳其を援けて
魯西亞と兵端を開き遂に高名なるクライミヤの戦争と
なり此間數多の合戦此處彼處に在りたる中最有名なる
ものは同年六月廿五日バラクラバの戦争にて英國の輕
騎隊六百騎が目之餘る敵の大軍中へ乗り込み古今無双
の手柄を顯はしたれども惜い哉衆寡素より敵し難く其
大概は討死し或は擒にせられ無難に歸陣したる者甚僅
にて有きと當時英國に有名なる詩人テニソン氏が其進
撃の有様を吟咏したる者にして何國人に限らず苟も英

語を解するもの此詩を暗誦せざるなこといふ

、山仙士

テニソン氏輕騎隊進撃の詩

其一

| | | | |
|-------------|-----|-----------|-----|
| 一里半なり | 一里半 | 並ひて進む | 一里半 |
| 死地に乗り入る | 六百騎 | 將は掛れの令 | 下す |
| 士卒たる身の身を以て | | 譯を糾すは分ならず | |
| 答をなすも分ならず | | これ命これに従ひて | |
| 死ぬるの外はあらざらん | | 死地に乗り入る | 六百騎 |

其二

| | | | | |
|-------|------|------|------|-----|
| 右を望め | は大筒そ | 前も | 左りも | 又筒そ |
| 共に打出す | 砲聲は | 天に轟く | いかつち | の |

| | |
|------------|------------|
| 響の如く凄まじや | 彈丸雨飛の間にも |
| 猛り立てそ進むなる | 死地にこそ入れ鱔の口 |
| 勇んで乗り入る六百騎 | |

其三

| | |
|-------------|-------------|
| 抜けは玉ちる刃をは | 皆諸共に振あけて |
| さらくくと輝けり | 敵陣近く乗り掛けて |
| 大砲方をなで切りす | 最と目冷しき働きそ |
| 煙の中に飛込みて | 烈しく陣を破るなり |
| 太刀の早業見事なり | 敵の軍勢たちくと |
| 遂にさゝふる事ならず | むらくぱつとむらくづれ |
| 馬の頭そ立直す | 以前に進みし六百騎 |
| 残るはいとくわつかなり | |

其四

| | |
|--------------|-----------|
| 右を望めば大筒ぞ | 左りも後も又筒そ |
| 共に打出す砲聲は | 天に轟くいかつちぞ |
| 彈丸雨飛の其中に | 縦横むじん切り靡く |
| 死地より出てく乗り歸へす | 鱧の口より脱れ出て |
| 歸るは元の一里半 | 六百人の其中て |
| 残るはいとくわつかなり | |

其五

| | |
|------------|------------|
| あゝ勇まじき武士の | 世に香しき其譽 |
| 手柄は永く傳へなん | 今のをさなご生立ちて |
| とる年あまた重なりて | 腰は梓の弓となり |
| 頭に霜を戴ききて | 孫彦やしやご多き時 |

六百人の豪傑が 敵の陣へと乗り入れる
 其古事を語りなば 末代までも名は朽ちじ

○朝貌の花に寄せて學童を奨勵す

小川鍵次郎

| | |
|------------|--------------|
| 庭のかきねの朝かほよ | 朝な〜おこたらす |
| 咲とも盡ぬ其花の | 色といひ又形までも |
| 同じ天地の恵みにて | 我等の目をば慰さむる |
| 深き心を白露の | 干るをもしらで寐きたるゝ |
| 人こそ花に劣るらん | 學ひの兒よ此花に |
| 負けず起出て機嫌能 | 貌打洗ひ父母と |
| 我身の無事を神に謝し | 庭の面のはき掃除 |
| 椽や襖の拭きはらひ | 怠らぬやうつとめよや |

やかて汝の實も花も 此 葬にまさるべし

庭のかきねの朝かほの 朝なくに 咲理由や

咲たる花の其色に 白といひ 又赤青と

異なる原因や其外に 我等の目をば慰さむる

心理の法や白露の 結ふ作用をしらて過く

人こそ人の甲斐なけれ 學ひの兒よ 此問を

疑ふならば躊躇せず 普通の學を疾く課へて

精神論や物理學 夫から夫と 研究し

化醇の律をあきらめて 學士哲士と呼ばれたら

幾 春秋の年月を 樂しき中に送る可し

今を 苔の汝の身 露の散る問も怠らず

勤めて徒に過ぎるなよ 花によく似た苔の兒

苔に似たる 學の兒

○題秋 (西詩和譯)

望月秋太郎

早やさしにけり秋の影 庭の木の葉ははらくこ

そよ吹く風に翻かへり 草屋を圍む垣の面の

苔のあからみいよ深き

賤の小家の静けさは 千ひらの金に勝るなり

浮世の塵をよそに見る 此かくれ家に聞ゆるは

時つく遠き鐘の聲

夏の縁りも消へはてゝ 山々深し秋の色
谷の水際に咲き残る 小草の花の紫も
色いとさめて哀れなり

秋の景色となるにつれ 時は來にけり去年までは
谷間を越えて諸共に 登り遊ひしあの山に
黄昏時になるまでも

今我れ爰に唯ひとり 待てとも更に聲はせで
移り傾く日の影に 健く幼なき面さしの
なほまほろしに見ゆるなり

移りきえ行く夕日影 獨り佇む戸の外に
西の山端のくれないの 色もいつしか消えうせて
黄昏暗くなるまでも

○ロングフェロー氏人生の詩

山仙士

そも靈魂の眠るのは 死ぬといふへきものぞかし
人の一生夢なりと 哀れなふして歌ふなよ
眠らにや夢は見ぬものぞ 此世の事は何事も
夢と思ひご左にあらず
人の一生夢ならず 最とたしかなる事ぞかし

人の終は墓なくも 墓にうつまるものならず
土より來り又土に 歸ると云ふは肉体ぞ
そりや靈魂の事ならず

此世に在りて樂むも 又苦しむも固と人の
世にある趣意にあらざらん 生るは役に立つ爲ぞ
日毎くに怠らず 今日 丈け一日の
功を立てねばならぬぞよ

光陰實に箭の如く 藝道最とも易からず
心は如何に猛くとも 墓なく進む葬禮の

送葬大鼓打つ胸は 音止めされたる大鼓の音
最とも哀れに響くらん

此世の中は戦争ぞ 其戦争の中に居て
人に生れた甲斐もなく 人に使はれ追はれつゝ
あゆむ羊や牛たるな 人に劣らず憤發し
功名手柄なすへきぞ

如何に樂しくおもふとも 未來はあてにすへからず
如何に嬉しく有つるとも 過去は昔しに過し事
働くへきは現在ぞ 其働を見る者は
胸の心と天の神

豪傑輩の一生を 熟ら思ひめくらせは
生きて甲斐なきものならず 人に勝れし手柄して
稀なる譽得るならば 名は香しく後の世に
永く傳へて残るらん

其香しき名を聞かば 社會の海に乗り出して
艱難辛苦の浪風に 吹き廻はされて破船して
助け船さへあらぬ身を 氣を取り直し憤發し
功名遂くる者あらん

されば人々怠たるな 暫時も猶豫するなかれ

運命如何につたなきも 心を落すとなかれ
たゆまず止まず自若とし 功名手柄なしつゝも
勤め働くをせよ

○ロングフェロー氏兒童の詩

尙今居士

來れわらはべかなはらに 汝か遊ふさま見れば
我等が多年苦みて なほとけさりし疑は
忽ち解けて露ほごの曇りも胸に止まらず
汝が遊ひたはるゝを 見るは恰も東なる
窓打あけて日に向ひ さるる鳥の聲聞て

| | | | | |
|-----|-----|------|------|-------|
| 清き空 | 氣や日 | の光 | 其作用 | を施して |
| 知らず | や茂る | 森の木は | いと美は | しきみどり |
| 葉に | 清き | ころろ | には | 如何なる |
| 事 | を告る | やを | 我耳 | 近くさゝ |
| 智 | を竭し | 我等 | が成 | せるわざ |
| も | 汝が | 様 | のか | はゆさに |

| | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 善き汁 | 液を造 | り成し | 幹と枝 | とを養 | ふを |
| 知れよ | のとけ | き氣候 | をば | うけて | 早くも |
| 幹には | あらで | 軟かき | 緑の | 葉にて | ありぬ |
| 森を | 此世に | たとふ | れば | 葉は | わらは |
| へ | かたは | らに | の | とけ | き天を |
| 花に | 戯れ | 啼く | 鳥も | 汝か | 清き |
| 如何 | なる | 事 | を告 | るや | を |
| 思慮 | をめぐ | らし | 智を | 竭し | 我等 |
| が書 | ける | ふみ | と | ても | 汝が |
| 様 | のか | は | ゆ | さに | |

汝か面の楽しさに 比ふることのあるべきや
人の賞する詩や歌は 世に數多くあるなれど
完全無虧の汝等に 及ふべきものにあらずかし
汝は生ける詩歌なり 他は皆死にし言葉のみ

○社會學の原理に題す

山仙士

宇宙の事は彼是の 別を論せず諸共に
規律の無きはあらぬかし 天に懸ける日月や
微かに見ゆる星とても 動くは共に引力と
云へる力のある故ぞ 其引力の働は

又定まれる法ありて 猥りに引けるものならず
且つ天体の歴廻れる 行道とても同じと
必ず定まりあるものぞ 又雨風や雷や
地震の如く亂暴に 外面は見ゆるものとても
一に定まれる法はあり 野山に生ふる草木や
地をはふ虫や四足や 空翔けりゆく鳥類も
其組織より動作まで 都て規律のあるものぞ
又万物は皆共に 深き由來と變遷の
あらざる物はなきぞかし 鳥けたものや草木の
別を論せず諸共に 親に備はる性質は
遺傳の法で子に傳へ 適するものは榮へゆき
適せぬものは衰へて 今の世界に在るものは

| | | | | | | | | |
|-----|------|-----|----|-----|------|------|-----|------|
| 桔梗 | かるかや | 女郎花 | 梅 | や | 櫻 | や | 萩 | 牡丹 |
| 牡丹 | に縁の | 唐獅 | や | 菜の葉 | に止まる | 蝶 | てう | や |
| 木の | 間に | 囀る | 鶯 | や | 門邊 | にあさる | 知更鳥 | や |
| 雲居 | に名 | のる | 杜鵑 | 同 | し | 友 | を | は呼子鳥 |
| 友を | 慕ひて | 奥山 | に | 紅葉 | ふみわけ | 啼く | 鹿 | や |
| 譯も | 分らて | 貝の | 音に | 追は | れて | あゆむ | 牛 | 羊 |
| 羊に | 近き | 猿は | まだ | 愚な | とよ | 萬物 | の | |
| 靈とも | 云へる | 人 | と | 今 | の | 體 | も | 腦力も |
| 元を | 質せば | 一様 | に | 一 | 代 | 増 | に | 少しづつ |
| 積み | かさな | れる | 結果 | ぞ | 今 | 古 | 無 | 双の |
| 見極 | はめ | たる | は | これ | ぞ | これ | アリ | ストー |
| 優す | も劣 | らぬ | 腦力 | の | ダ | ル | ウ | 井 |
| | | | | | | | | ン |
| | | | | | | | | 氏 |
| | | | | | | | | の |
| | | | | | | | | 發 |
| | | | | | | | | 明 |
| | | | | | | | | ぞ |

| | | | | | | | |
|-----|-----|-------|----|----|---|----|----|
| これに | 劣らぬ | スベンセル | 同じ | 道理 | を | 擴張 | し |
| 化醇 | の法 | て進む | のは | ま | の | あ | たり |
| 動物 | 而已 | にあらず | して | 凡 | そ | あり | と |
| 活物 | 死物 | 夫而已 | か | 有 | 形 | 無 | 形 |
| 區別 | と更 | になかり | し | を | 真 | 理 | 極 |
| 感ずる | も尚 | ほあまり | あり | さ | れ | ば | 心 |
| 思想 | 智識 | の發達 | も | 言 | 語 | 宗 | 旨 |
| 社會 | の事 | も皆 | 都 | て | 同 | し | 理 |
| 既にも | もの | せる | 哲學 | の | 原 | 理 | の |
| 生物 | 學 | の原 | 理 | や | ら | 心 | 理 |
| 土臺 | とな | して | 今 | 更 | に | 社 | 會 |
| 書にも | もの | さる | と | 最 | 中 | ぞ | 此 |
| | | | | | | | 書 |
| | | | | | | | に |
| | | | | | | | 載 |
| | | | | | | | せ |
| | | | | | | | て |
| | | | | | | | 説 |
| | | | | | | | か |
| | | | | | | | る |
| | | | | | | | と |
| | | | | | | | は |

そも社會とは何ものぞ 其發達は如何なるぞ
 其結構に作用に 社會の種類如何なるや
 種族と親と其子等の 利害の異同如何なるや
 男女の中の交際や 女子に子供の有様や
 取扱の異同やら 種々な政府の違ひやら
 違ひの起る原因や 僧侶社會のある故や
 其變遷の原因や 儀式工業國言葉
 智識美術や道德の 時と場所との異同にて
 遷り變りて化醇する 其有様を詳細に
 論述ありて三卷の 長き文にぞせらるべき
 最とも目出度き美舉にこそ 既に出てたる一卷を
 讀たる者は誰ありて 此書を褒めぬ者ぞなき

實に珍敷しき良書なり 社會の事に手を出して
 何から何とせむをやく 責任重き役人や
 走り書きやらからしやべり 舌も廻らぬくせにして
 天下の事は一と飲みと 法螺吹き立てり利口ふる
 新聞記者や演説家 此書を読みて思慮なさは
 人をあやつる罪とがの 少しは減りもするならん
 月日の事や星の事 動植物や金屬や
 夫等の事はさて置きて 凡そ天下の事業は
 疊一枚させばとて 足袋を一足縫へばとて
 長の年月年季入れ 寐る眼も寐ずに習はねば
 出来る事にはあらざるに 獨り社會の事計り
 年季も入らず學問も するに及はぬ譯なれば

新聞記者や役人と 成るは最と最と易けれど
 簡様な者が多ければ 忽ち國に社會黨
 尙ほ恐ろしき虚無黨の 起るは鏡に見る如し
 操めに操めたる其上句 虻蜂取らすの丸潰れ
 秩序も建たず自由なく 泥海にこそなるべけれ
 再ひ浪風静まりて 太平海と成る迄は
 百年足らず掛らんは 革命以後の佛蘭西の
 有様見ても知れたと そこに心が付きたらば
 妄に手出しする勿れ 妄にしやべると勿れ
 廣き世界の其中に 恐るべきもの多けれど
 盲目同士の戦に 越したるものはあらぬかし
 硯ひきまらぬ棒打の 仲間入りこそあやぶけれ

今の世界は旋風 烈しく旋る時なるぞ
 烈しき中へついで一寸 絡き込まれたら運の盡
 足も据はらず瞑眩めいけんき 頭はいとくぐら付きて
 ぐるくぐると廻はされて すき間もあらず廻はされて
 上句のはては空中へ 絡き上げられて落されて
 初て悟る其時は 早遅蒔の辣椒
 後悔先きに立ぬなり 颶風烈しく吹く時は
 其吹く中へ過ちて 船を入れぬが楫取の
 上手とこそは云ふべけれ 政府の楫を取る者の
 輿論を誘ふ人たちは 社會學をば勉強し
 能く慎みて輕卒に 働かぬやう願はしや

○遊墨水歌

飯田 武郷

隅田川堤の櫻。咲みたれ。みたるゝ盛咲にほひ。匂ふ遠近梢に
は雲をなひかし木蔭には雪こそつもれ見渡の筑波の山は
春霞かすめる空にはのくくと半みえそめ水上の舟の帆影
ははなれ洲を早くはなれて目の前に近付にけりとりよろ
ふ。氣色をみればよる波の。音ものどけく行水の。かけも静か
に自。心おちるておもしろみ。遊ふ此日の暮すもあらぬか
皆人の心ひらけて隅田川。遊ふさかりを花もみるらむ

○詠和氣公清磨呂歌

久米 幹文

八隅しゝ和期大王の見したまふ。御夢のひまにかき濁る。弓
削の川波おほけなく。逆のほらひてあふぎみる。高坐山の高
峰をもひたし汚せは。此世は海にやならむ人皆は魚にやな

ると天の下。なけかふはしに廣幡は。八幡の神の神憑り。我國
はしも天地の。始の時ゆ上下の。ことわり正し。くなたふれ。穢
きものは神逐ひ。やらひすてゝよ打罰め拂ひそけよとたゝ
告に。のらし給へれ大御言。いたゝく臣のおほれむ事も思は
す沈まむ身をも忘れて。畏と歸奏せは。長いのみ夢は覺て惱
まじきみ心うせめ逆卷水速けれど。立騒く波高けれど。大御
稜威に争そひかねて。未終にくたり落たり其臣の功は高く
其臣の名さへさやけく後世の。鏡にせむと稱め給ひ。治めた
まひて神とさへ。いはひ奉らす事の尊とさ
君こそは水附屍と弓削川の逆卷波をたゝ渡りつれ

新體詩歌第三集畢

明治十七年四月廿三日
翻刻御届
同年五月出版

(定價金八錢)

編輯兼
原版主

和歌山縣平民

竹內隆信

翻刻人

山梨縣平民

內藤傳右衛門
西山梨郡常盤町四番地